かまどのめし　初稿　冒頭

20240320

エリー

目次

1、カエデ誕生 1
2、村と街 3
3、噂とマドレーヌ 6

1、カエデ誕生

　その瞬間、わたしは人生を振り返った。

◆◆◆

　生まれた夜の話を、ヘチマさんとキウイさんから何度も聞いた。
　二人とも父であるポトスの同級生。遠い都会で暮らす父の代わりに、母のオモトと娘であるわたし「カエデ」を気にかけてくれる。

　山奥の村でお産はできない。
　母オモトは、近くの町の病院でわたしを産んだ。
　出生時間の連絡を受けたヘチマさんとキウイさんは、すぐに村の占い師ユウギリさんの元へ駆けつけた。
　たぶん、寝ようとしていたのだろう。玄関チャイムを激しく鳴らされて、ユウギリさんは歯磨き途中で扉を開けた。
　ホロスコープを見るようにせかすヘチマさんとキウイさんを、とりあえず落ち着かせたそう。
　まず歯磨きを済ませる。
　それから端末に出生図を表示する。
　一目見て、ユウギリさんが考え込む。
　理由は、太陽と金星と土星が４ハウス牡牛座で重なっていたからだ。

「五感を育てることが人生の目的だが、課題でもある。成長に時間がかかるだろう。愛ゆえに迷う」
　ユウギリさんの言葉に、「父ポトスと母オモトの娘なら有能だろう」と思い込んでいた二人は、親しみを感じたそう。
　ヘチマさんの悪口にキウイさんが共感する。
「つまり、どんくさい？」

「俺らと同じ？」
　親近感と心配で顔を見合わせ、同時に決意する。
「ポトスの代わりに俺らが見守る！」
　親指を立ててみせる二人に、ユウギリさんは優しくうなずいた。
「ああ、１２歳まで子どもを育むのが村の役割だからな」
　そう、１５０年前の日本とは違うのだ。

　生まれたのは、２１７６年5月1日、午後１０時２５分、日本。
　子どもが7歳から１２歳まで、小さな村で、小遣いを稼ぐ世界。
　読み書き計算以外は、「稼ぐ」という実践に必要なことだけ学ぶ。
　たくさん行動して、集中力を鍛える。
　そんな厳しい世界で、どんくさいわたしが、どんな夢を持ち、どう生きたか、耳を傾けてくれたら嬉しい。

2、村と街

１５０年前との違いをざっくり説明すると、住む場所と年齢で生き方が決まる点だろう。

たいていの人は、村で育つ。子どものうちに村の運営や自営の基礎を身につける。
そして１３歳から１５歳まで、近くの町で工場勤めの義務を果たす。組織を学び、村で使うものを作る。
１６歳で大人と認められ、村に戻って義務を果たすか、都会に出て自由を金で買うか、選択することなる。

山奥の村では、センターと呼ばれる施設を中心に、扇状に一戸建ての平屋が並ぶ。
大人一人に一軒。
１２歳までの子どもも一緒に住む。たいてい１人か、２人くらい。
女の子は、女性としか住めない。父親であっても。
下の子が生まれたら、上の子は、子育てを終えた知り合いに託される。

センターの近くに年寄りが住む。次に子どものいる家庭。一番外側は、１６歳以上の若い男女。
山側に近いので、散歩がデートコース。
右半分が女性で、左半分には男性が暮らしている。

衣食住は配給なのでみんな同じ。
一般の人は、白い合わせの上着とズボン。
役職がある場合、色で立場を表している。
指導的な立場で、相談される人は目立つように赤を着る。
職務の決定権を持つ人は紫を着る。

村と村は、道路で結ばれていて、自動走行のトラックが走る。主に通販で買ったものを運んでくる。
「国土保護」と「介護、看護、育児」と「基幹産業」を担う村は、使用できるものが制限されている。
環境に負荷がかかることはできないルール。

対して、鉄道網で結ばれている近くの町は、衣食住は自由。
配給ではなく、稼いだ金で買う。
日本人にだけ解放されているだめ、別名「国内都市」という。

さらに遠い街は、外国人にも解放されているため、「国際都市」と呼ぶ。
東京、横浜、名古屋、大阪、博多の５つ。
土地が限られているため、上に伸ばすしかない。高層ビルが密集している。

村では、一人前に仕事ができれば、誰でも発言できる。
話し合いで物事が決まる。
弱者烙印を押されたものには、発言権がない。しかし衣食住は平等。

対して、都会では、村を支えるための金を出した人が代表者として選ばれる。
自分で金を稼いで払う人を貴族議員と呼ぶ。
仲間から金を集めて払う人を平民議員と呼ぶ。
代表者だけが政治活動をする。

全く異なるルールで動いているため、住み分けている。
村には、0から１２歳の子どもと、１６歳から５９歳の労働者、６０歳以上の隠居がいる。
街には１６歳以上、３９歳までの若い男女が暮らす。
３９歳までに老後資金を得られない場合、村に戻る。
そして４０歳から６０歳まで、他人のために働く。

３９歳で老後資金がないのに、村に帰らなかった人は、働き続ける。
稼げなくなったら、繁華街にあるビルで安楽死する。
別名「死の街」と呼ばれる。

たいていの人は、村、町、街、村と年齢別に住み替える。
家族が解体されて、個人で選択して生きる世界。
遺産の継承もなく、誰もが１６歳で３０万から挑戦する厳しい世界。
その目的は、外貨を稼げる人材を育てる為。

本来、村の政治や、街で稼ぐことに醍醐味がある人生になる。
しかし、集中力がなくて、高級人材と無縁のわたしは、都会で大変な目に遭う。
その話の前に、６歳のわたしがどんな子どもだったか、聞いてほしい。

3、噂とマドレーヌ

食事は朝、昼、夕方の３回。
各自でセンターにある給食室に集まり、仕事に間に合うように食べる。

朝は卵とワカメの味噌汁とご飯。
昼は豚汁とご飯。
夜は肉か魚のおかずとご飯。
質素にして健康的。
足りない場合は、魚を釣って焼いたり、木の実を取って食べる。
６歳までの子どもが食べられるものはそれだけ。

７歳になるとおこづかいを稼ぐことができる。
噂によると手に入れたお金で、給食では出ない甘い食べ物を買えるらしい。
６歳までの子どもには内緒なので、誰も目の前では食べない。
けれども、「突然家に帰ったら、嗅いだことのない美味しそうな匂いがした」という話はよく聞く。
絵本にある「お菓子」というものではないか。
子ども同士で噂しあっていた。
６歳のわたしは、「マドレーヌ」という焼き菓子の味を想像してワクワクしていた。

稼ぎ方はいろいろある。
洗濯物をたたむ。掃除をする。センターから自宅まで荷物を運ぶ。家事系は、安いが始めやすい。端末の掲示板に依頼が来るからだ。しかし、おいしい仕事は、掲示板に載る前に営業をかけられ取られてしまうそう。
かまどでご飯を炊く。田んぼや畑を手伝う。山に入って木くずの片付けをする。仕事系は、見習い期間がある。
催し物を開いて参加料を取る。関係者から金を集めて問題を解決する。イベント系の仕事は、当たり外れがある。ほとんどの子どもはできない。自分で仕事を見つけて、金を引き出すため、成功させたら将来を期待される。

わたしのお母さんは、給食係をしている。だからわたしも、お母さんに習って、かまどで飯を炊くことにする。
仕事に慣れるため、６歳になると調理場に着いていくことが許される。

その日は、昼ごはんの準備のため、母はほうれん草を茹でる支度をしていた。
お椀の底に沈めて、豚汁を注ぐのだ。
わたしの初見学なので、ヘチマさんとキウイさんも来ていた。

大きな鍋に水を張り、薪で沸かす。
母はわたしに見張りを頼んだ。
「鍋の底から小さい泡が出たら呼んでね」
「うん！」
ほうれん草を洗うため、母が水場に行く。
離れた場所で、ヘチマさんとキウイさんが話している。

眺めていても、水に変化はない。
楽しいから鍋は見ているが、何のために見ているのか、忘れてしまう。
鍋の底に小さな泡が見えた時、年上の子どもたちがお小遣いで買ったシャボン玉のようだと思う。
ぱちん。
泡が浮かんで、水面で弾ける。
シャボン玉が弾けて、せっけん水が目に入ったことを思い出す。
すごく痛い。泣いた。
母に水場に連れていかれて、目を洗った。
せっけんといえば、洗うものだ。
洗うと言えば、ユウギリさんはいい匂いのするシャンプーをお小遣いで買っているという。
シャンプーを買うのもいいなぁ。
でもマドレーヌもいいし。
ほしいものが次々浮かんでくる。
もう鍋は全く見てなかった。
「カエデ、鍋！」
「は！」
グラグラ沸き立ち、もうもうと湯気が上がっている。

母だけでなく、ヘチマさんとキウイさんも近くに来る。
ヘチマさんが心配そうに言う。
「やっぱりカエデちゃんに７歳からは無理だ」
わたしは焦る。マドレーヌが遠ざかる。
「俺らが村と話をつけてきますよ」
キウイさんが賛成する。
わたしのマドレーヌ！
「大丈夫。通常、付き添いは一週間だけど、一年しようと思うの。お小遣いは半額になるけど、１年待つよりいいでしょ？」
いい。すごくいい！
「うん！」
わたしは母に抱きついた。
優しい手が、頭をなでてくれた。

次は、こんな性格のわたしが、見習いでどうなったのか、聞いてほしい。

かまどのめし　初稿　冒頭　20240320

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社